

腫瘍細胞は、不規則な形で短い胞体突起を有し、種々の程度にメラニン色素を有していた。免疫組織学的には、一部の細胞でS100蛋白陽性、ケラチン陰性であった。ヒトのメラノーマと同様に腫瘍悪性度が高く、病理学的にヒトに近似した特徴を示したイヌの悪性黒色腫であった。

## 12. Human T-lymphotrophic virus type I (HTVL-I) associated myelopathy (HAM)の1剖検例

(脳神経センター神経内科) 佐々木彰一・  
小森 隆司・小林 逸郎・  
竹宮 敏子・丸山 勝一  
(第1病理) 武石 詢

Human T-lymphotrophic virus type I (HTLV-1) associated myelopathy (HAM)の1剖検例を報告する。症例は61歳男性、1960年1月十二指腸潰瘍で手術

し、その際輸血をうけた。同年12月両下肢の weakness に気づいた。1972年つま先歩行になり、転倒することが多くなった。1986年9月両下肢のしびれ感および疼痛が出現した。以後、歩行障害は緩徐に進行した。1988年7月18日当科に入院。神経学的に両下肢は痙性麻痺で中等度筋萎縮を認めた。筋トーンは両下肢で著明に亢進し、病的反射(+). Th10以下の感覚過敏および軽度小脳症状を認めた。血清・髄液中で ATLA 抗体が陽性。神経病理学的所見：脳重量は1,220g。肉眼的には両側基底核に小梗塞巣がみられた。脊髄は全体的に atrophic で特に胸髄レベルで著明であった。光顕的には主病変は第1頸髄から第3仙髄の脊髄側索路にみられ、特に胸髄下部で著明であった。病変部では、脱髄、軸索の消失、ヒアリン化した多数の細小血管およびグリオージスが認められた。